精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの専門的価値認識

－養成課程卒業前 PSW　0 年生へのインタビュー調査－

○　日本福祉大学　　大谷　京子（会員番号 002998）、田中　和彦（日本福祉大学・007020）

寺澤　法弘（日本福祉大学・005898）、吉田　みゆき（同朋大学・004027）

キーワード：自己規定、対象者観、経年インタビュー調査

１．研 究 目 的

ソーシャルワーカーの専門性について、明確な答えをいまだ共有できていないが、専門的価値を基盤にしていることについて異論の余地はないだろう。しかし価値は、個々の専門職やその集団の認識にあり、実態として測定するのが困難である。見事な実践を展開するエキスパートが、専門的価値を醸成しているのかも、明確な判断はできない。そもそも価値観は養成することができるのか、成長するものなのかさえ、明らかにされていない。

これまでの先行調査から、具体的実践行為の基礎に専門的価値が必要であること、専門的価値は「自己規定（自らの役割をいかに規定するか)」「対象者観（クライエントをどのような者と捉えるか)」に表現されることが示唆されてきた。

そこで、「自己規定」と「対象者観」を軸に、PSW の専門的価値の変化を明らかにすることを目的に、養成課程卒業後の 3 年間、PSW の価値認識がどのように変化していくのかを追いかける経年インタビュー調査を企画した。本報告は、養成課程卒業前の、実践経験のない 0 地点での価値認識を明らかにすることを目的に実施したインタビュー調査の報告である。

２．研究の視点および方法

調査期間は、2015 年 2 月 24 日から 3 月 26 日までである。調査協力者は、社会福祉士、あるいは精神保健福祉士養成課程を卒業間際の 0 年生である PSW14 名である。この時点で、国家資格取得の有無は分からなかったが、精神保健福祉領域での就職が決まっている 14 名に依頼した。研究チームメンバーの所属する養成機関の学生と他大学教員に紹介された学生たちである。

卒業前の自己規定と対象者観を知るために、インタビューガイドとして、①ＰＳＷはどのような役割を果たす職種だと考えていますか、②どのようなＰＳＷになりたいと考えていますか、③ＰＳＷにとってクライエントはどのような存在だと考えますか、④クライエントからどのように評価されたいですか、の 4 点を設定し、半構造化インタビューを実施した。卒業時点で PSW としての「自己規定」は成立しえないことから、「なりたい PSW 像」を問うことにした。その音声を IC レコーダーで録音し、すべて逐語記録に起こした。

語りの中から、「役割認識」、「自己規定」と「対象者観」に関わるとみなされる箇所すべてを抽出し、KJ 法にならったカードワークによって抽出された要素同士の関連を検討しな

がら、類似するものをカテゴリーとして整理した。

３．倫理的配慮

調査協力者には研究の趣旨を口頭と文書で説明し、調査協力の承諾を得たうえで契約書を交わした。録音データは研究以外の目的では使用しないことと研究終了後に廃棄することを約束し、その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

４．研 究 結 果

PSW の役割としては、「クライエント(以下 Ct)の気持ちを聴く」「Ct を理解する」「考えながら Ct と共に行動する」「Ct の意思、希望を大切に、実現に向けて協力する」「Ct の可能性を広げる」「他者とつながりをつくり、社会変革をする」などのカテゴリーが得られた。全員が語るものと、一部の協力者が語るものがあったが、対立する意味内容の語りはなかった。「なりたい PSW 像」については、「価値を守れる」「安心感のある、Ct が少し前向きになれるような PSW」「自分が武器なので自分の人生を大切にしたい」というカテゴリーについては、対立する語りがなかったが、「頼りにされる」「転ばぬ先の杖」「PSW のおかげとお礼を言われる」については、全く逆の語りが得られた。対象者観については、「Ct は私を成長させてくれる人」というカテゴリーには対立するコメントがなかったが、「支援の受け手」「助けが必要」については真逆の語りが得られた。

5. 考 察

PSW の役割について、協力者たちの認識は一致していた。ミクロからメゾ、マクロまでを包含する、「何をどのようになすべきか」が語られた。その内容は具体的ではないものの、伝達が比較的容易な役割については、養成教育の中で、一定の共通認識の教育ができていることが推測できる。しかし自己規定の基礎になるであろう「なりたい PSW」像と対象者観については、真逆のものがある。このことから、学生がどのようにソーシャルワーカーとしての立ち位置を定めるか、クライエントをいかに捉えるべきかという価値が表現される部分について、認識は共有されていないことが示された。ここから、養成教育において価値教育スタンダードが定まっていないことが推測される。

14 名の語りによる調査の結果を般化することはできないが、把握の困難な価値認識の一端を捉えることができたのではないかと考えている。

ソーシャルワークの専門的価値のあくなき探求と、養成課程の中でそれをいかに捉えるべきかの理論的研究と、それを実践に具現化させるための認識をいかに伝達しうるかの研究が、今後の課題である。

本調査は、平成 26-29 年度文部科学省科学研究費基盤（C）の助成(課題番号 26380800)を受けて実施したものである。